

真宗伝道学体系の一試論

奥 田 桂 寛

一 はじめに

真宗伝道学は、龍谷大学にて一九七〇年に開講されて以来、ある程度の研究成果が蓄積されており、近年では、実践を志向した実践真宗学への展開が見られ研究が進められている。しかし、真宗伝道学における先行研究の整理・体系化を試みた研究は、必ずしも多くはない。真宗伝道学の体系化は、真宗伝道学自体の進展のみならず、今後さらなる発展を期する実践真宗学が注力すべき課題を明白にすると考えられる。そこで、本稿では真宗伝道学の体系化を試みるが、その方法として、親鸞教義に基づく真宗伝道の理論的枠組みを抽出し、その枠組みを用いて体系化を試みる方法で行うこととする。

二 先行研究の整理と研究の視座

体系化に関するこれまでの先行研究は、伝道（教化）の構

造を重視するものと、親鸞教義を重視するものに大別でき、それぞれ傾聴すべきものである。

思うに、真宗伝道である以上、その根拠は親鸞教義に求められるべきであるから、先行研究に示されるような親鸞教義の重視の視点は至当といえる。他方で、真宗伝道に関する研究を見れば、その研究成果には歴史分野も多く存するため、本稿では、理論分野とは別項目を形成すると考えたい。よって、本稿ではこれらの点を踏まえ、親鸞教義を重視しつつ歴史分野にも光を当て、より広い視点から真宗伝道学の体系化を試みたい。

三 親鸞教義に基づく真宗伝道の構造

では、それらの前提として、従来の研究成果に則りながら、⁽³⁾親鸞教義に基づく真宗伝道の構造を確認する。

親鸞の名著『顕浄土真実教行証文類』（以下、『教行信証』とする）の「教巻」標挙には、「大無量寿経 真実之経 浄土

真宗」とあるが、この『大経』において、我々の救済は、機受の極要といわれる第十八願成就文（諸有衆生、その名号を聞きて、信心歓喜せんこと、乃至一念せん。至心に回向せしめたまへり。彼の国に生れんと願せば、即ち往生を得、不退転に住せん。唯五逆と誹謗正法とをば除く）に示されている。この解釈に関して、『一念多念文意』にて、聞即信の意が述べられ、「聞」について『教行信証』『信巻』にて、「然経言聞者衆生聞仏願生起本末無有疑心是曰聞也」（しかるに『経』に聞といふは、衆生、仏願の生起本末を聞きて疑心有ること無し、これを聞といふなり）とされる。すなわち、「仏願の生起本末」を「疑心」なく聞くことが、そのまま救済成立の根拠である信となることが明らかとなる。

この救済の主体は、「无慚无愧のこの身にて まことのこゝろはなけれども 弥陀の回向の御名なれば 功德は十方にみちたまふ」（『正像末和讃』）とあるように、我々凡夫ではなく、名号であり、第十七願が誓われ成就することで、諸仏によつて我々に至り届いている（『唯信鈔文意』）。この名号のいわれを聞信した者の一つの姿が、親鸞教義によれば真の仏弟子といえるであろう。この信心の人である真仏弟子について「信巻」では、御自釈に続く引文の中に、常行大悲の益、知恩報徳の益に相当する文が引かれた後、自信教人信の文が置かれている。

これらを踏まえると、先行研究にも指摘されるように、真宗伝道は、仏から私に届いていた「一人がため」の救済を、他者へと伝えていくというベクトルが看取できる。すなわち、聞によつて自信が明らかとなり、その利益の発露により教人信への道を歩み始めるのである。それは、名号に込められた衆生救済のいわれを疑いなく聞信した者が、その恩徳に報謝するために、報恩行たる念仏を相続し、他者たる被伝道者に伝えようとつとめる行為であり、これを機縁として、被伝道者が、同じく「仏願の生起本末」を聞き、仏徳讃嘆がなされていくという構造をもつといえる。

そして、このような真宗伝道について、真宗学における代表的な分野（例えば、真宗教義学、浄土教理史、真宗教学史等）、或は先行研究に多く指摘される通り、諸科学を用いた学際的な手法により明らかにする営みが真宗伝道学ということが出来る。

四 真宗伝道学体系の一試論

以上の様な構造を踏まえ真宗伝道学の体系について検討する。

前述の真宗伝道について、伝達という場面を重視すれば、あくまで御同朋・御同行という立場でありつつも、その構成要素として、伝道者（ここでは仏徳讃嘆をする者とする）、被伝

道者が看取でき、さらには、伝道内容（伝わる内容であり、様々ありうるが、ここでは名号のいわれが中心となると考えたい）、伝道方法が抽出でき、これらが基本的分析枠組みを構成するといえる。それぞれの要素には、さらなる細分化も可能であるが、大きくはこれらの要素に収斂すると考えられる。

そして、真宗伝道学は、直接的には、前述の真宗伝道を対象とした学問であるから、伝道者、被伝道者、伝道内容、伝道方法の4つが基本的な研究領域となり得る。但し、これらは一つの伝道行為を微視的・分節的に捉えたものであるから、有機的関連性を持つことはいうまでもなく、複数の領域に渡る研究も当然ながらありうる。これらを各論とした場合、伝道の定義、目的、根拠等を総論と位置づけることが出来る。

以上から、教義・教学或は諸科学の理論に基づく、①伝道者、②被伝道者、③伝道内容、④伝道方法に関する研究及び総論部分が基本的領域になると考えられる。

①伝道者……どのような者が（教義・教学・諸科学からの伝道者、伝道の集団・組織、それらの存する社会状況等、またどのような行為を行うかについての研究）

②被伝道者……どのような者に（教義・教学・諸科学からの被伝道者、地方、年齢、性別、職業、被伝道者の属

真宗伝道学体系の一試論（奥田）

する社会（前項の伝道者の属する場でもある環境等）

③伝道内容……何が伝わるのか（名号のいわれ）「仏願の生起本末」が中心となる）

④伝道方法……どのようにして（仏徳讃嘆の表現手段・方法、表現媒体等）

次に、従来の真宗伝道についての研究は、大きくは、理論と歴史の分野に大別できると考えられるが、歴史領域についても、上記理論領域における要素が妥当すると考えられる。

この点、歴史領域においては「真宗伝道史」たる領域が唱えられてきた。この「真宗伝道史」は、当初、発展途上のものと位置づけられてきたが、近年、真宗史からの抽出という方法により研究の進展が見られる。⁽⁴⁾しかし、真宗史から抽出される「伝道」とは何かという疑問が残り、真宗史との分水嶺は必ずしも明瞭でない。それは、研究対象となる真宗伝道の構造と構成要素が明らかにされていない点が原因の一つであろう。

そこで、上記の理論枠組みを用いることで、「真宗伝道史」は、従来の真宗史の領域から、理論領域における総論と、各論の各要素に対応する部分を基本としつつ、それを支える集団・組織或は社会環境・時代背景等を加味したものを基本的内容とするものと考えられる。

五 おわりに

以上、親鸞教義を重視し、親鸞教義から抽出された構成要素により理論枠組みを構築し、先行研究に示される要素、研究内容を加味しつつ、より広い視点からの試論を提示した。

但し、このような検討を踏まえれば、残された課題がいくつか明らかになる。

すなわち、従来の文献学的・思想的研究を主とした真宗伝道学では包摂することが必ずしも容易でない領域をどのように扱うかである。例えば、浄土真宗本願寺派が行った第9回宗勢基本調査の結果を参照すれば、住職や坊守の役割への期待、あるいは寺院の運営に関する議論も求められていることがうかがえるが、住職論、坊守論、門信徒論、寺院運営論などの領域は、従来の文献学的・思想的研究には馴染みにくい性質があった。また、ビハーラ活動、カウンセリング活動、ボランティア活動、非営利組織活動、矯正・保護、自死問題、平和問題、環境問題、その他、伝道者の養成等といった、真宗伝道学に包摂されることが必ずしも簡単ではない分野が実践の場では必要とされている。

また、代表的な真宗学における領域（真宗教義学、浄土教理史、真宗教学史等）との関係や研究方法についても検討が必要である。

さらに、真宗伝道学は、実践真宗学への展開が期待されているが、その実践真宗学の方法、領域などは形成過程にあるといえ、その際に神学における研究内容・方法等が参考にされるべきである。

これらをも含めた実践真宗学の領域、体系、研究方法の構築も必要であるが、これらは今後の課題としたい。

- 1 大西憲明、山崎昭見『現代仏教教化法』（百華苑、一九八二年）三五頁。池田勇諦「教化学とは何か」（『真宗研究』一二二号、一九七六年）一一一頁。小松雄道『世界宗教伝道の基礎学』（世界宗教政治伝道研究会、一九七〇年）五三頁、五四頁。長岡岳澄「真宗学における伝道学の位置付け」（『宗教研究』七七巻四号、二〇〇四年）七三頁。
- 2 深川宣暢「真宗伝道学方法論の考察」（『真宗学』一一九・一二〇号、二〇〇九年）二二二頁。
- 3 深川宣暢前掲論文。貴島信行「真宗伝道における自信教人信の意義」（『真宗学』一二九・一三〇号、二〇一四年）一四九頁。
- 4 高山秀嗣『中世浄土教者の伝道とその特質——真宗伝道史研究・序説——』（永田文昌堂、二〇〇七年）一五頁。

〈参考文献〉

註記載のもの他、葛野洋明「実践真宗学における研究方法の研究」（『真宗学』一二九・一三〇号、二〇一四年）二二二頁。

〈キーワード〉 伝道、真宗伝道学、体系

（龍谷大学大学院）